

## 子どもの怒り経験と怒り表出に関する研究

- 教師に怒りを感じた場合について -

中 村 多 見

### **Children's experience of anger toward their teachers and anger expression**

**Tami Nakamura**

#### Abstract

The main purpose of this study was to investigate the relationships among children's experience of anger toward their teachers, cognitive judgments, emotion, and target of anger expression. A total of 274 forth-trough ninth-grade students participated in this study. Children's recent anger episodes were assessed in terms of the instigator (male teacher or female teacher), cognitive judgments, anger expression, etc. By combining the instigator with the target of children's anger, two groups (congruent and incongruent) were identified and compared. The main results were as follows : (1)There was little anger expression to their teachers. (2)The incongruent group was more likely to choose a target higher affection and lower in status than their teachers. (3)Compared to the congruent group, the incongruent group was using offensive anger expression abundantly.

key words : experience of anger, anger expression, children, teachers

#### 問題と目的

文部科学省は昭和57年度より、公立中学校、高等学校における「校内暴力」の発生状況について、対教師暴力、生徒間暴力、器物損壊の3形態から調査を行ってきた。また、平成9年度からは、小学校も対象に加えるとともに、学校における暴力を「自校の児童生徒が起こした暴力行為」と定義し、調査対象となる暴力行為を「対教師暴力」、「生徒間暴力」、「対人暴力」、「器物損壊」の4形態に改め、発生状況を調査している。

文部科学省(2003)によると、平成14年度における児童生徒の暴力行為の発生状況は、学校内での暴力行為が29,454件(小学校1,253件,中学校23,199件,高等学校5,002件)で、学校外での暴力行為が4,311件(小学校140件,中学校3,096件,高等学校1,075件)であった。前年度に比べ、学校内での暴力行為が11.1%減、学校外での暴力行為が15.5%減で、

平成12年度をピークとして年々減少する傾向にある。暴力行為の形態別では、小・中・高等学校いずれも生徒間暴力が最も多く、器物損壊、対教師暴力、対人暴力が順に続く。加害児童生徒数の内訳は、中学3年生が最も多く、全体の33.0%を占めている。また性別で見ると、約9割が男子であった。

このような文部科学省（2003）の結果から、学校における暴力行為の大半が生徒間暴力であり、中学生男子によって引き起こされていると言えるだろう。また、学校における暴力行為はここ1、2年ではあるが減少傾向にある。この傾向について、安易な楽観的評価を下すことは危ぶまれるが、文部科学省（2002）の「21世紀教育新生プラン」に代表される「子どもの人間性や心の教育」や、メディアによる子ども危機感の浸透など、子どもへの注目度が非常に高まっていることが、子どもの暴力行為を抑制するような影響を及ぼしたとも推測できる。

しかしながら、学校における暴力行為は減少傾向にあるものの、思いを言葉にできず暴力に訴えたり、問題行動をあまり示していなかった子どもが突発的に暴力的になったりする、いわゆる「キレ」や「キレル」などと称される事案が、依然として問題視されているのも事実である。

昭和57年度より開始・継続されている文部科学省の調査は、学校における暴力行為の発生状況について、暴力行為の形態別の発生件数を主な調査内容としている。子どもの暴力行為を含む問題行動について研究するとき、その発生件数も有意な情報であるが、“なぜ問題行動が生じたのか”という発生原因や理由についての情報も当然必要になってくる。問題行動の発生件数という情報は、長期間の変動的推移を量的に把握するには非常に意味である。しかし、問題行動の解決もしくは介入を目指すならば、問題行動を一連のプロセスとして、原因、背景、内容、結果など質的に多方面から捉える必要性が出てくる。

磯部・中村・江村（2004）や中村（2003）は、子どもの暴力や攻撃行動について、怒りという情緒的側面から検討している。怒りが対人関係の中で経験されやすい（Averill, 1982）という性質を踏まえて、親や友人に対して怒りを感じたときの原因や背景（以後、怒り経験とする）、その怒りをどのような方法で誰に対して表出するのか（以後、怒り表出とする）、また怒りを表出した後の情緒的側面についてなど、怒りの喚起と表出のプロセスの中の1つに攻撃行動を位置づけた研究を行っている。

学校における対人関係には、大きく友人関係と教師関係の2つがある。友人関係における暴力行為は、文部科学省（2003）が定める「生徒間暴力」に相当し、最も発生件数の多

い暴力行為である。このことは、中村（2003）の友人関係における子どもの怒り経験と怒り表出に関する研究からも、同様のことが示唆されている。つまり、友人に感じた怒りは、その友人に対して直接、もしくは怒りを感じた友人とは異なるが同じ友人という間柄の人物に向けられやすいことが分かっている。また、磯部ら（2004）の親子関係における子どもの怒り経験と怒り表出に関する研究でも、親に感じた怒りを直接、親に対して表出できない場合、その怒りは友人に向けられることが多かった。すなわち、怒りの喚起と表出のプロセスにおける友人の存在は、怒りを感じやすくさせたり、そしてそれを暴力的に表出しやすい可能性を高める条件の1つになっていると推測される。

次に、教師関係における暴力行為は、文部科学省（2003）が定める「対教師暴力」に相当する。平成14年度の発生件数は、小学校184件、中学校3,957件、高等学校715件で、小・中・高等学校とも前年度に比べて減少している。加害児童生徒数は、小学校139件、中学校3,098件、高等学校772件で、中・高等学校は前年度に比べて減少しているが、小学校では増加していた。また、被害教師数は、小学校176人、中学校3,794人、高等学校735人で、小・中・高等学校とも前年度に比べて減少している。このように、学校における「対教師暴力」も徐々に減少しているが、児童生徒が教師に対して暴力的になった原因や暴力の具体的内容についてはやはり分かっていない。つまり、児童生徒が暴力を振るった原因やきっかけが教師自身にあるのか否か、教師への暴力に対して児童生徒はどのように認識しているのか、教師に対する暴力とはどのような内容か、などは明らかにされていない。そのため、子どもが教師に対して暴力的になることに関して、根本的な理解が得られない。そして、対教師暴力を含めた、学校における暴力行為への対策を講じるにも不明な点多すぎる。

そこで、本研究では、教師関係における子どもの怒り経験と怒り表出について検討することを目的とする。具体的には、どのような教師からどのようなことをされて怒りを感じたのか、そして、その怒りを誰に対してどのように表出したか、といった怒りの喚起と表出のプロセスに関する内容を、エピソード法を用いた質問紙で調査する。また、本研究では、“教師に対する怒りを誰に表出するか”が重要であるため、怒り表出の段階において、怒りを感じた教師と同じ人物を選択した者を一致群、怒りを感じた教師とは異なる人物を選択した者を不一致群として分類し、教師との怒り経験や怒り表出における一致群と不一致群の差異について検討する。

## 方 法

**対象者** 兵庫県と広島県の公立小中学校に在籍する小学4年生から中学3年生の児童生徒274名（男子144名，女子130名）に質問紙調査を実施した。

**手続き** 担任が学級ごとに質問紙を配布し，回答を得た後，回収した。回答時間はおよそ30分であった。

**質問紙の構成** Averill（1982）や大淵・小倉（1984）を参考に，「怒りの日常経験」の質問紙を作成し，怒り対象を「教師」に設定した質問紙を作成した。

**怒り経験** 被験者に，過去1週間で最も怒りを感じた経験を1つ想起してもらい，具体的に記述させた。過去1週間に強く怒りを感じた経験のない者には，それ以前の経験を記述させた。

**怒り対象の特定** 確認のため，怒りを感じた対象について，男性教師か女性教師かを明記させた。

**怒り対象への好意度（1項目）** 怒り対象に対する好意度について，「好きでない（1点）」～「とても好き（5点）」までの5件法でたずねた。

**怒り対象との地位関係（1項目）** 対象者から見た怒り対象の地位について，「あなたより弱くてこわくない存在（1点）」，「あなたと同じくらいの強さでこわくない存在（2点）」，「あなたより強くてこわい存在（3点）」の3件法でたずねた。

**被害（6項目）** 怒り経験において，対象者が受けた被害として，身体的苦痛，物質的損害，欲求不満，プライドの損傷，道義違反（ルールや約束を破る），期待に背くの6つを取り上げ，それぞれについて「しなかった（1点）」～「たくさんした（3点）」までの3件法でたずねた。

**被害に対する認知判断（予測性と意図性，各1項目）** 予測性（怒り対象はあなたが怒りを感じることを予測していたと思うか）について，「あなたが怒りを感じる事が分らなかった（1点）」，「どちらでもない（2点）」，「あなたが怒りを感じる事が分かっていた（3点）」の3件法でたずねた。意図性（怒り対象はあなたを意図的に怒らせようとしたと思うか）について，「わざとではない（1点）」，「どちらでもない（2点）」，「わざとである（3点）」の3件法でたずねた。

**怒りの強さ（1項目）** 怒り経験において感じた怒りの強さについて，「とても弱い怒り（1点）」～「とても強い怒り（5点）」までの5件法でたずねた。

**表出対象の特定** 怒り経験において感じた怒りを表出した対象について，父親，母親，

兄，弟，姉，妹，男友達，女友達，男性教師，女性教師の12の対象からひとつ選択させた。どれにも当てはまらない場合は，「その他」としてその対象を具体的に記述させた。

表出対象への好意度（1項目） 表出対象に対する好意度について，「好きでない（1点）」～「とても好き（5点）」までの5件法でたずねた。

表出対象との地位関係（1項目） 対象者から見た表出対象の地位について，「あなたより弱くてこわくない存在（1点）」，「あなたと同じくらいの強さでこわくない存在（2点）」，「あなたより強くてこわい存在（3点）」の3件法でたずねた。

表出反応（8項目） 怒り経験において感じた怒りを表出した手段について，身体的攻撃，言語的攻撃，間接的攻撃，怒りの伝達（壁を殴るなどして相手に怒りを伝える），話し合い，相談，鎮静（こころを鎮める），隠蔽（怒りを隠す）の8つを取り上げ，それぞれについて「しなかった（1点）」～「たくさんした（3点）」までの3件法でたずねた。

表出反応に対する認知判断（予測性と意図性，各1項目） 予測性（あなたは表出対象が怒りを感じることを予測していたか）について，「相手が怒りを感じる事が分からなかった（1点）」，「どちらでもない（2点）」，「相手が怒りを感じる事が分かっていた（3点）」の3件法でたずねた。意図性（あなたは表出対象を意図的に怒らせようとしたか）について，「わざとではない（1点）」，「どちらでもない（2点）」，「わざとである（3点）」の3件法でたずねた。

表出後の気分（9項目） 怒り表出後の気分について，喜び，腹立ち，勝利感，落胆，嫌悪感，恥，爽快感，心配，楽の9つを取り上げ，それぞれについて「そういう気持ちにならなかった（1点）」～「とてもそういう気持ちになった（3点）」の3件法でたずねた。

## 結 果

### 教師との怒り経験について

#### 1. 怒り対象と表出対象の一致と不一致の分類

表1は，怒り対象と表出対象が同じである「一致群」と，怒り対象と表出対象が異なる「不一致群」の人数構成を，怒り対象別に示したものである。怒り対象が男性教師，女性教師ともに，不一致群の人数の方が一致群よりも多かった。このことから，教師への怒りは教師に対して直接的に表出されることは少なく，教師とは異なる対象へ表出されることが多いことが分かる。

表 1 怒り対象別の一致群と不一致群の人数

		一致群 (n = 32)	不一致群 (n = 242)
怒り対象	男性教師	16	130
	女性教師	16	112

表 2 は、怒り対象の特徴である「好意度」と「地位関係」の平均値と標準偏差を怒り対象別、群別に示したものである。「好意度」と「地位関係」について、怒り対象別に一致群と不一致群の間に差異が認められるかどうかを検討するために *t* 検定を行った。その結果、女性教師への好意度のみ有意傾向が見られ、不一致群の方が一致群より得点が高い傾向にあった。また、男性教師および女性教師との地位関係においては、いずれも有意な群差は認められなかった。

表 2 怒り対象への好意度および怒り対象との地位関係の怒り対象別・群別の平均値 (SD)

		一致群 (n = 32)	不一致群 (n = 242)	<i>t</i> 値
男性教師	好意度	1.94 (0.85)	2.38 (1.15)	-1.50
	地位関係	2.75 (0.45)	2.54 (0.60)	1.36
女性教師	好意度	1.81 (0.83)	2.42 (1.22)	-1.92†
	地位関係	2.38 (0.72)	2.38 (0.65)	-0.05

†  $p < .10$

## 2. 被害

表 3 は、被害（身体的苦痛，物質的損害，欲求不満，プライドの損傷，道義違反，期待に背く）の平均値と標準偏差を怒り対象別，群別に示したものである。被害 6 項目について、怒り対象別に一致群と不一致群の間に差異が認められるかどうかを検討するために *t* 検定を行った。その結果、怒り対象が男性教師の場合における「物質的損害」が有意で、一致群の方が不一致群より得点が高かった。また、「期待に背く」においても有意傾向が認められ、一致群の方が不一致群より得点が高い傾向にあった。怒り対象が女性教師の場合では、「欲求不満」において有意傾向があり、一致群の方が不一致群より得点が高い傾向にあった。

表3 被害の怒り対象別・群別の平均値 (SD)

		一致群 (n = 32)	不一致群 (n = 242)	t 値
男性教師	身体的苦痛	1.44 (0.73)	1.26 (0.54)	1.19
	物質的損害	1.31 (0.70)	1.08 (0.33)	2.23*
	欲求不満	1.75 (0.77)	1.53 (0.70)	1.18
	プライドの損傷	1.81 (0.75)	1.75 (0.73)	0.34
	道義違反	1.44 (0.81)	1.46 (0.66)	- 0.13
	期待に背く	1.81 (0.91)	1.47 (0.72)	1.75 †
女性教師	身体的苦痛	1.19 (0.40)	1.10 (0.38)	0.88
	物質的損害	1.00 (0.00)	1.10 (0.38)	- 1.03
	欲求不満	1.88 (0.72)	1.56 (0.69)	1.68 †
	プライドの損傷	1.81 (0.83)	1.78 (0.77)	0.17
	道義違反	1.44 (0.73)	1.38 (0.65)	0.36
	期待に背く	1.44 (0.81)	1.41 (0.65)	0.15

\*  $p < .05$  †  $p < .10$

### 3. 被害に対する認知判断と怒りの強さ

表4は、被害に対する認知判断である「予測性」と「意図性」、および怒りの強さの平均値と標準偏差を怒り対象別、群別に示したものである。「予測性」と「意図性」について、怒り対象別に一致群と不一致群の間に差異が認められるかどうかを検討するために  $t$  検定を行った。その結果、怒り対象が男性教師、女性教師とも有意な群差は認められなかった。

次に、怒りの強さについて、怒り対象別に一致群と不一致群の間に差異が認められるかどうかを検討するために  $t$  検定を行った。その結果、怒り対象が男性教師の場合に有意傾向が認められ、一致群の方が不一致群より怒りが強い傾向にあった。

表4 被害に対する認知判断 (予測性, 意図性) および怒りの強さの怒り対象別・群別の平均値 (SD)

		一致群 (n = 32)	不一致群 (n = 242)	t 値
男性教師	予測性	1.94 (0.68)	1.76 (0.68)	0.98
	意図性	1.38 (0.62)	1.62 (0.65)	- 1.40
	怒りの強さ	3.63 (1.41)	3.08 (1.19)	1.70 †
女性教師	予測性	1.81 (0.83)	1.64 (0.64)	0.95
	意図性	1.56 (0.81)	1.49 (0.64)	0.40
	怒りの強さ	3.31 (1.01)	2.99 (1.17)	1.05

†  $p < .10$

## 怒り表出について

### 1. 表出対象

表5は、不一致群が表出対象として選択した人物の内訳を示す。その結果、不一致群が表出対象として多く選択したのは、母親や年下のきょうだい、友人であることが分かる。

表5 不一致群の表出対象の内訳

			怒り対象	
			男性教師 (%)	女性教師 (%)
表出対象	父	親	0 ( 0.0)	3 ( 2.7)
	母	親	18 (13.8)	20 (17.9)
		兄	8 ( 6.2)	5 ( 4.5)
		弟	10 ( 7.7)	13 (11.6)
		姉	5 ( 3.8)	5 ( 4.5)
		妹	11 ( 8.5)	11 ( 9.8)
		男 友 人	43 (33.1)	28 (25.0)
		女 友 人	23 (17.7)	24 (21.4)
		男 性 教 師	-	0 ( 0.0)
		女 性 教 師	1 ( 0.8)	-
		そ の 他	11 ( 8.5)	3 ( 2.7)

表6は、怒り対象と表出対象の特徴である「好意度」と「地位関係」の平均値と標準偏差を怒り対象別、群別に示したものである。表出対象の特徴については、不一致群のデータを用いて、怒り対象の特徴との差異を  $t$  検定を用いて検討した。その結果、好意度については、怒り対象が男性教師、女性教師ともに有意で、表出対象への好意度の方が怒り対象への好意度よりも得点が高かった。また、地位関係についても、怒り対象が男性教師、女性教師ともに有意で、怒り対象との地位関係の方が表出対象との地位関係より得点が高かった。

表6 怒り対象および表出対象の好意度と地位関係の怒り対象別・群別の平均値 (SD)

		一致群 (n = 32)	不一致群 (n = 242)	t 値
男性教師	好意度	1.94 (0.85)	2.38 (1.15)	- 6.08***
		-	3.27 (1.30)	
男性教師	地位関係	1.81 (0.83)	2.54 (0.60)	9.06***
		-	1.88 (0.62)	
女性教師	好意度	2.75 (0.45)	2.42 (1.22)	- 5.42***
		-	3.37 (1.46)	
女性教師	地位関係	2.38 (0.72)	2.38 (0.65)	6.63***
		-	1.82 (0.65)	

注) 不一致群の上段が怒り対象の平均値, 下段が表出対象の平均値 \*\*\*  $p < .001$

## 2. 怒りの表出反応

表7は, 怒りの表出反応(身体的攻撃, 言語的攻撃, 間接的攻撃, 怒りの伝達, 話し合い, 相談, 鎮静, 隠蔽)の平均値と標準偏差を怒り対象別, 群別に示したものである。怒りの表出反応8項目について, 怒り対象別に一致群と不一致群の間に差異が認められるかどうかを検討するために  $t$  検定を行った。その結果, 怒り対象が男性教師の場合では, 「身体的攻撃」と「言語的攻撃」, 「怒りの伝達」において有意で, いずれも不一致群の方が一致群より得点が高かった。怒り対象が女性教師の場合には, 「身体的攻撃」においてのみ有意で, 不一致群の方が一致群より得点が高かった。このことから, 攻撃的に怒り表出をするとき, 怒りを感じた教師に対してよりも教師以外の人物に対しての方が, より攻撃的になりやすいことが明らかになった。

表7 怒りの表出反応の怒り対象別・群別の平均値 (SD)

		一致群 (n = 32)	不一致群 (n = 242)	t 値
男性教師	身体的攻撃	1.06 (0.25)	1.42 (0.62)	- 2.29*
	言語的攻撃	1.50 (0.82)	2.03 (0.78)	- 2.57*
	間接的攻撃	1.00 (0.00)	1.12 (0.34)	- 1.34
	怒りの伝達	1.06 (0.25)	1.38 (0.64)	- 1.99*
	話 合 い	1.25 (0.58)	1.23 (0.51)	0.14
	相 談	1.63 (0.72)	1.45 (0.69)	0.93
	鎮 静	1.44 (0.63)	1.70 (0.71)	- 1.41
	隠 蔽	1.44 (0.73)	1.45 (0.68)	- 0.05
女性教師	身体的攻撃	1.00 (0.00)	1.38 (0.60)	- 2.48*
	言語的攻撃	1.75 (0.68)	2.02 (0.73)	- 1.38
	間接的攻撃	1.00 (0.00)	1.21 (0.50)	- 1.62
	怒りの伝達	1.19 (0.40)	1.45 (0.70)	- 1.45
	話 合 い	1.19 (0.54)	1.24 (0.54)	- 0.37
	相 談	1.31 (0.60)	1.49 (0.74)	- 0.93
	鎮 静	1.38 (0.50)	1.60 (0.74)	- 1.17
	隠 蔽	1.50 (0.63)	1.38 (0.62)	0.70

\*  $p < .05$

### 3. 怒りの表出反応に対する認知判断

表8は、怒りの表出反応に対する認知判断である「予測性」と「意図性」の平均値と標準偏差を怒り対象別、群別に示したものである。「予測性」と「意図性」について、怒り対象別に一致群と不一致群の間に差異が認められるかどうかを検討するために  $t$  検定を行った。その結果、怒り対象が男性教師、女性教師ともに有意な群差は認められなかった。

表8 怒りの表出反応に対する認知判断 (予測性, 意図性) の怒り対象別・群別の平均値 (SD)

		一致群 (n = 32)	不一致群 (n = 242)	t 値
男性教師	予 測 性	2.25 (0.58)	2.08 (0.62)	1.07
	意 図 性	1.75 (0.86)	1.85 (0.69)	- 0.56
女性教師	予 測 性	2.06 (0.68)	2.17 (0.67)	- 0.60
	意 図 性	1.88 (0.72)	1.78 (0.71)	0.52

## 考 察

本研究は、学校における暴力行為の1つである「対教師暴力」について、教師関係における子どもの怒り経験と怒り表出という観点から検討を行った。その結果、男性教師、女性教師ともに、一致群よりも不一致群の人数が圧倒的に多かった。このことは、教師に怒りを感じても、その怒りを直接的に教師に対して表出することが非常に少ないことを示している。また、一致群が教師に対してどのような怒り表出をしたかという点、身体的ダメージのない言語的攻撃や相談、鎮静や隠蔽といった怒りを抑制するような方法を用いていた。これは、文部科学省（2003）が「対教師暴力」の具体例として挙げている“教師の胸ぐらをつかんだ”、“教師めがけて椅子を投げつけた”、“教師に故意に怪我を負わせた”などの暴力的な怒り表出とは異なっていた。

一方、不一致群が教師への怒りを表出する対象として多く選択していたのは、母親や年下のきょうだい（弟と妹）、友人であった。不一致群が、母親や年下のきょうだい、友人を表出対象として選択した理由は、表6に示したとおりである。すなわち、怒り対象としての男性教師、女性教師には、表出対象としての母親や年下のきょうだい、友人、その他に比べ、「好意度が低く、地位が高い」という特徴があり、教師は怒りを表出する対象として不適切であると判断されていた。このことから、怒りを表出しやすい人物の特徴には、“自分が好きでそれほど地位も高くなく甘えさせてくれる、もしくは自分の怒りを受け止めてくれるような信頼関係にある身近な人物”という特徴があると推測される。そして、そういった甘えの影響が、怒り表出においてより顕著に見出されている。身体的攻撃や言語的攻撃、怒りの伝達といった攻撃的な怒り表出を、不一致群が一致群に比べて、多用していたという結果である。つまり、怒りをあらわにすることで崩れるような人間関係ではない関係性を、母親や年下のきょうだい、友人との間に築いており、その関係性ゆえに甘えや許してもらえらるという感覚が生じ、攻撃的にエスカレートした怒り表出をしてしまうのかもしれない。このような関係性の中にある甘えに影響されたと考えられる結果が、友人関係および親子関係に焦点をあてた子どもの怒り経験と怒り表出の研究においても見出されている（磯部ら、2004；中村、2003）。

Storr（1968）は、「正常な攻撃性の発達には、大人の存在が必要である」という見解を示し、子どもの攻撃性を受け止め、子どもの内面にうまく統合させる大人の役割の重要性を説いた。子どもにとっての身近な大人とは、家庭では「親」であり、学校では「教師」である。磯部ら（2004）は、親に対して直接、怒りを表出しない子どもが多いことを見出

している。本研究でも、教師に対して直接、怒りを表出しない子どもが非常に多いことを見出した。子どもたちは、怒りをあらわにすることができる対象をきちんと選択しているように思われるが（磯部ら，2004；中村，2003），それが子どもたちの心の健康や正常な攻撃性の発達にとって適切なのかは不明である。事実として分かっているのは、親や教師といった子どもにとって身近な大人に対する怒りを、子どもは親や教師に向けないということである。

Storr（1968）は、少年犯罪の増加と子どもの攻撃性を受け止める親の役割の低下を関連づけている。また、財満（1999）は対教師暴力の背景に、「子どもの問題」、「家庭の問題」、「学校や教師の問題」、「社会やマスコミの問題」の4つを取り上げ、現場の教師が意外にも「教師の問題」を背景に挙げる場合が多いことを明らかにしている。本研究やその他の研究（磯部ら，2004；中村，2003）から、大人に対する子どもの怒り表出が少ないことが明らかにされてきたが、その原因が攻撃性を受け止める大人の役割の低下にあるとしたら、非常に憂慮すべき事態であると考えられる。そして、子どもの正常な攻撃性の発達に何らかの影響を及ぼしている可能性もあると示唆できる。

今後の課題として、子どもが身近な大人に対して怒りを感じたときの怒り表出について詳細に調査し、子どもの心の健康との関連を検討していきたい。

## 引用文献

- Averill, J. R. (1982) Anger and aggression : an essay on emotion. New York: Springer-Verlag.
- 磯部美良・中村多見・江村理奈（2004）子ども怒り経験と怒り表出に関する研究 - 親に怒りを感じた場合について - , 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域）52, 253 - 258
- 文部科学省（2002）21世紀教育新生プラン  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/21plan/main\\_b2.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/21plan/main_b2.htm)
- 文部科学省（2003）生徒指導上の諸問題の現状について（概要）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/15/12/03121902.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/12/03121902.htm)
- 中村多見（2003）子どもの怒り経験と怒り表出に関する研究，第5回認知・発達フォーラム，3 - 4
- 大淵憲一・小倉左知男（1984）怒りの経験（1）：Averillの質問紙による成人と大学生の調査概況，犯罪心理学研究22，15 - 35
- Storr, A. (1968) Human aggression. Middlesex, England: Penguin Press.
- 財満義輝（1999）校内暴力，教育相談重要用語300の基礎知識，明治図書

高 松 大 学 紀 要

第 43 号

平成17年 2月25日 印刷

平成17年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学  
高 松 短 期 大 学  
〒761-0194 高松市春日町960番地  
TEL (087) 841 - 3255  
FAX (087) 841 - 3064

印 刷 株式会社 美巧社  
高松市多賀町 1 - 8 - 10  
TEL (087) 833 - 5811